

**論文紹介 池上尚「水クサイの意味変化-水ツポ  
イとの共存過程から考える-」 『日本語の研究』  
10(2): 33-48. (2014)**

著者	池上 尚
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	6
号	1
ページ	33-34
発行年	2015-06
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000804">http://doi.org/10.15084/00000804</a>

池上尚

「水クサイの意味変化—水ッポイとの共存過程から考える—」

『日本語の研究』10(2): 33-48. (2014)

## 池上 尚

本稿では、接尾辞 -クサイのうち、具体名詞を上接し〈～の不快なおいがする〉さまを表すAクサイ（池上 2013）の結合例に分類される水クサイに注目し、①味覚表現への使用が可能になるこの語の表現特性とはいかなるものか、②感覚表現語から心情表現語への意味の交替は何に起因するのか、という意味の問題について考察した。

図1に示すように、水クサイは、酒から〈水の不快なおいがする〉こと、つまり、酒についてⅡ〈水分が多くて味が薄い〉さまを表す味覚表現語として中世前期末に誕生した。近世前期には、叙述対象が拡大するのに伴い意味の抽象化が生じ始める。すなわち、酒に限らず食べ物のⅢ〈味が薄い〉さま、抽象的な物事である人物の行為についてⅣ〈情愛が薄い〉さまを表すようになる、という二方向の意味変化である。しかし、近世後期に至り、中央語が上方語から江戸語へと移り変わる際、水クサイはⅣ〈情愛が薄い〉という意味領域のみが江戸語に伝播し、Ⅱ〈水分が多くて味が薄い〉・Ⅲ〈味が薄い〉という意味領域は、江戸俚言水ッポイや甘イ・薄イなどの類義語の存在により江戸語の味覚表現語彙から拒否されることになった。その結果、中央語としての水クサイに感覚表現語から心情表現語への変化が生じたのである。そして、水クサイが本来「水（分量）」

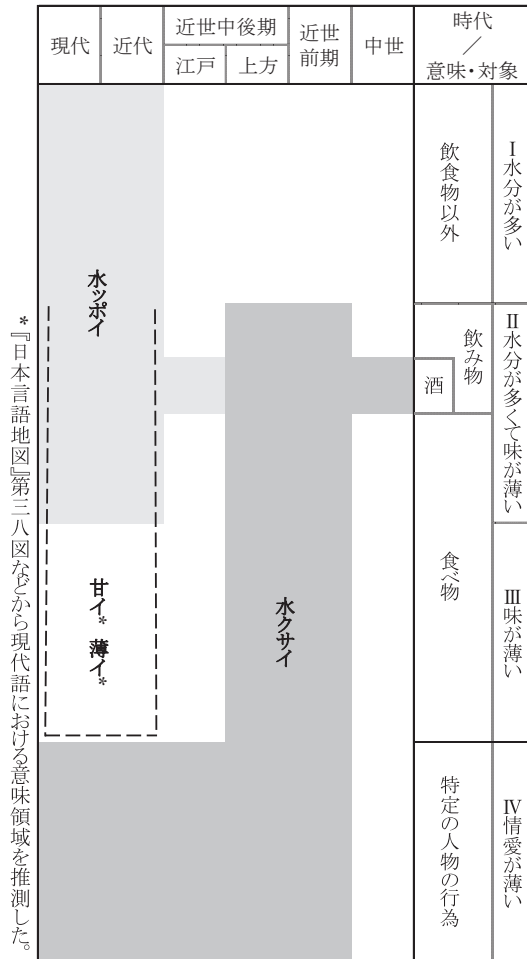


図1 水クサイ・水ッポイの意味領域の変遷

に注目する語であったことを踏まえると、同じく「水（分量）」を描写する語であった水ッポイが、味覚表現語彙における競合の中で最も意識された水クサイの類義語であったと考えられる。中央語の史の変遷を扱う場合、上述したような“中央語の伝播に対する地方の「受容」や「拒否」といった「受け手の論理」（小林 2010）に配慮する必要があるだろう。

本稿が特に重視した水ッポイは、『日本言語地図』第 38 図（質問文：「しる（つゆ）などを作ったとき塩の味の足りないのを言うのに、しる（つゆ）の味がどんなだと言いますか。」）によって関東地方に点在することを確認できるものの、加藤（1966）をはじめとするこれまでの言語地理学の先行研究では十分に触れられてこなかった。また、現代共通語における水クサイと水ッポイとが類義語と意識されにくいために、-クサイ・-ラシイ・-ポイの記述を進めてきた現代語研究においても 2 語が比較対照されることはなかった（玉村 1988, 森田 1989, 山下 1995, など）。本稿の意義は、従来看過されやすかった 2 語の関係性を史的観点から検討することで、-クサイという一接尾辞内の意味の広がりのみならず、他の接尾辞との意味の重なりをも視野に入れた語彙史研究の一例を示したところに存すると言える。

#### ●参考文献●

- 池上 尚(2013)「接尾辞 -クサシ再考—古代・近代の使用状況から—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』21(2): 25-38.
- 加藤正信(1966)「『日本言語地図』から—〈砂糖が〉あまい・〈汁の塩味が〉うすい—」『言語生活』17: 66-71.
- 小林 隆(2010)「日本語方言の形成過程と方言接触—東日本方言における“受け手の論理”—」『日本語学』29(14): 32-44.
- 国立国語研究所(1966)『日本言語地図第 1 集』東京：大蔵省印刷局.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』東京：角川書店.
- 玉村千恵子(1988)「嗅覚と非嗅覚—合成語「-くさい」をめぐって—」『月刊日本語』1(6): 60-64.
- 山下喜代(1995)「形容詞性接尾辞「-ばい・-らしい・-くさい」について」『講座日本語教育』30: 183-206.

#### 池上 尚 (いけがみ・なお)

国立国語研究所コーパス開発センター プロジェクト非常勤研究員。博士（学術）（早稲田大学）。2014年2月より現職。主な著書・論文：「嗅覚表現形容詞「カグハシ」「カウバシ」「カンバシ」—近世以降における意味・用法の分担過程—」（『国文学研究』162, 2010）, 「嗅覚表現自動詞二ホフの意味の下降について—[名詞+スル]との関連から—」（『国文学研究』170, 2013）, 「モノクサシの語史—嗅覚表現〈くさい〉から性向表現〈ものぐさ〉へ—」（『国語語彙史の研究』34, 2015）.